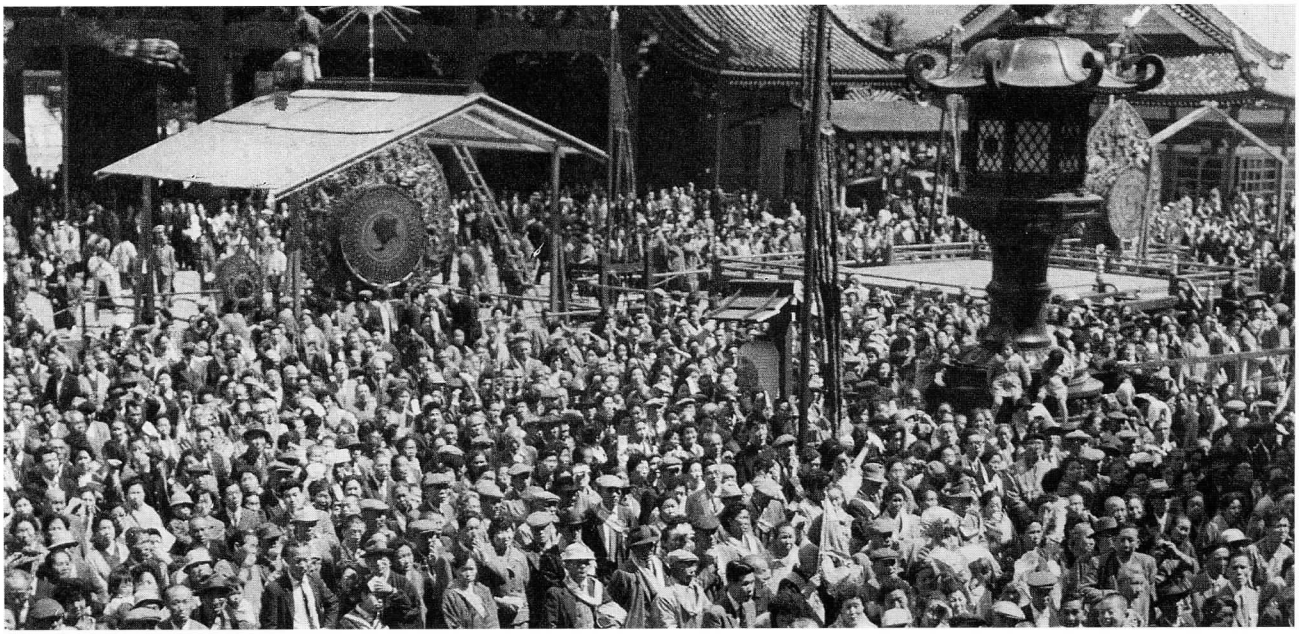
教区御遠忌テーマ
今、いのちがあなたを生きている
流罪からの出発
-私はどこで生きているのか-

高田教区報

響流

第120号

発行所
上越市寺町2丁目24-4
真宗大谷派 高田教務所
編集　響流編集委員会
発行　杉本了恵
印刷　文化印刷㈱



宗祖七百回御遠忌法要

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌を前にして
―二度の御遠忌法要の間で―

第五組林覺寺住職　直江智成

昭和三十六年四月、大谷大学二回生。十四日から二十八日までの二週間、賑々しく勤められた宗祖親鸞聖人の七百回御遠忌法要。教団としての取り組みはどのようであったかほとんど知らない私たち学生は、法要の各部局へ連日奉仕に借り出されていました。京都駅頭まで出迎え、案内、御影堂整理、弁当手配、出版物販売等々。私は出版物の特命販売を命じられていました。日中・逮夜の二度の法要時には休む暇無く飛んで回っていたことを思い出します。夜には、京都会館・高倉会館・大谷婦人会館等での講演、法話の聴講に明け暮れ、又仏教青年会のパレードには教区の一員として参加も致しました。

ところで私自身が、この法要そのものには直接関わらなかったけれども、この年を契機に同朋会運動と言う形で進められてゆく信仰運動の中で、小職を始め多くの方が改めて真宗の教えや信心をはっきりさせてきたのです。昭和四十四年の開申に始まる十余年のいわゆる本願寺騒動も、昭和五十六年の新宗憲の発布に至るまでの歩みをして、同朋会運動の歩みの確かさを証明する事となったと言えましょう。そして平成十年に迎えた蓮如上人の五百回御遠忌法要は慙愧の御遠忌を願われたと云う。慙愧あれば其処に人の誕生となる。今七百五十回御遠忌法要を前にして、推進員養成講座が積極的に進められています。人（にん）・推進員の誕生です。同朋会運動で同朋の会が開かれ其処に人が誕生し、動き出す。教団の呼びかけで寺が動き、寺の呼びかけで人が動いてきた是までと違って、今度は人が、推進員が動き、寺や教団が呼応する方向を願わずにはおれません。「推進員に寺が乗っ取られる」と言われた育成員がおられたと聞きましたが、乗っ取られて良いんです。新しい寺の形態が出来るかも知れません。

ともあれ七百回御遠忌から五十年。同朋会運動の中で開かれた同朋の会。誕生した人・推進員、明年迎える七百五十回御遠忌法要を機に更なる動きを感じるとともに念願しています。

高田別院・新井別院報恩講

得度受式者の集いを終えて

得度研修会主任　**津島　勇彰**

去る十月八日初逮夜より十一日結願日中まで、高田別院報恩講が三昼夜にわたり厳修されました。その中日にあたる十日の日中法要時に、「得度式受式者の集い」が行われたことをご存知でしょうか。これは得度をされて新たに真宗大谷派僧侶としての歩みを始められた方々に、別院報恩講への出仕を通して改めて得度の意義を確認されることを願い、あわせて参詣の皆さまと一緒に新しい僧侶の誕生を祝いたいという思いから初めて企画をしたものです。

実施に当たっては高田別院様に日中法要の開始時間を三十分早めるというご配慮をいただき、式支配、列座役の方々のご協力もあって、無事に開催することができました。

当日は大人四人、子ども三人の参加があり、直綴、墨袈裟の装束で余間へ並んで出仕をされ、正信偈草四句目下、念仏讃三淘のお勤めの後に本堂外陣にて記念品の贈呈式が行われました。名前を呼ばれて一人ずつ教務所長より記念品を手渡されると、大勢の参詣者から盛んな拍手がおこっていました。

今年度は第一回ということもあって、いろいろと試行錯誤をしたところもありましたが、滞りなく進行できたように感じていますし、また次年度以降も継続して開催できるようにしていきたいと思います。そして参加をされた方々には、これからも別院報恩講等への出仕をしていただければと思います。

今まで別院報恩講に出仕されたことの無い僧侶の皆様も、一度別院報恩講に足を運んでみませんか。

高田別院報恩講に参加して

第三組明了寺　小四　**杉田　滉**

ぼくは、高田別院ほうおんこうに参加しました。ぼくは、どういうぎしきを行うのか心配しました。

一番には、ほうおんこうをしました。とても長くてびっくりしました。だけど一生けんめいやったので成功しました。これがほうおんこうだと知りました。ほうおんこうは、しょうらいやると思うのでしっかりと、きちんとおぼえたいなと思いました。

二番には、記ねん品をもらいました。ぼくの名前をよばれたけど前の人を見てこうやるんだとしっかり見といたおかげでしっかりできました。記ねん品をもってる人は、高田別院の輪番さんだと思いました。目の前に輪番さんがいるときんちょうしたけど成功してうれしかったです。ぼくの名前をよんだとき、だんかの人たちがぼくのときだけ、はくしゅしてくれてびっくりしました。帰ってあけて見ると、お母さんと同じじゅずが入っていました。ぼくは、お母さんと同じところまできたんだと心でかんしんしました。これから一歩一歩お寺さんの道を進んでみようと思いました。これからだんかの人たちといっしょに明了寺を守っていきたいと思いました。

報恩講によせて

第三組明了寺門徒　**丸山　巌**

ご縁がありまして高田別院の報恩講の中日、結願おたいや法要に参詣させていただきました。

境内には屋台店が並び、お昼には多くの人手がありました。昔は、大勢の善男善女でそれは大変な賑わいであったと伺っています。

午前九時半に喚鐘が鳴り、雅楽が流れて荘厳な法要が始まり、御堂には心地よい読経が流れます。

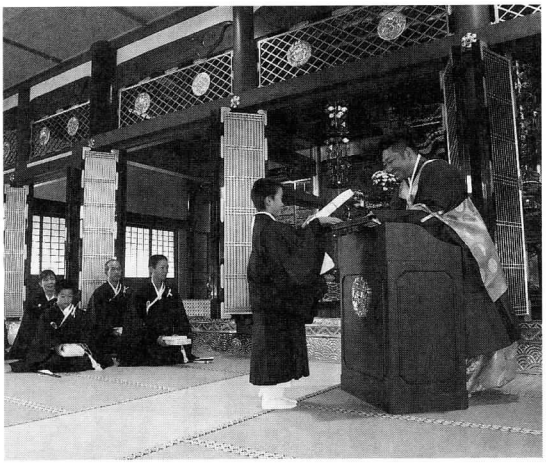
御内陣には、九才の自坊の稚児がこのたび本山で得度を受け、可愛らしく僧衣をまとい袈裟の姿で大人の僧侶の後に続いて着座しました。

読経後には多くのご門徒さまの前で得度受式者のご披露を受け、幼いながら仏の道へ歩みだしたことに限りない喜びと胸に熱くこみあげる感動を覚えました。

若い人の寺離れ、過疎地の門徒の減少、社会の絆や連帯の希薄化等々、寺の護持が年々むつかしくなる中で、幼い担い手が生まれたことは本当にありがたい光明です。

前途は容易でないにしても今日の喜びは忘れません。明日の希望を信じております。

ここに私的な感想を高田教区報に取りあげて下さることにとまどいながらも、この報恩講のご縁に心から感謝を申し上げます。　合掌



得度受式が終わり高田別院報恩講に参加して

第六組林西寺　**岡田　照美**

四月、五月と得度研修を受け、六月の本山での得度受式を迎えるまで、あわただしい日々を過ごしてきました。受式を終えたものの普段は、仕事を持っているため寺のことは義母に頼りっぱなしの日々です。が、そんな時、別院報恩講の日中出仕の案内を頂きました。とても私が出向く所ではないと思いましたが、得度受式者の集いという言葉に誘われて、参加してみようと思いました。

当日、控え室で白衣に着替える時は何とも言えない緊張感がありました。余間出仕という事でしたが、私にとってはとても貴重な体験をさせて頂いたと思います。

その後、本堂において得度受式者の集いをして頂き、門徒さんの前ということもあり、あらためて寺族としての責任を感じました。

出仕させて頂いた日は、とても天気の良い日に恵まれ、不安で一杯だった私の気持ちも明るくなったような気がしました。これから先、学んでいくことがたくさんあると思いますが、私なりに少しずつ前に進んでいけたらいいと思います。

新井別院報恩講

第七組良明寺門徒　**久保田　一**

十一月一～四日の日程で新井別院の報恩講が勤まりました。私は、親鸞聖人大根煮のお手伝いをさせていただきました。

あいにく三日は天気が目まぐるしく変わり、なかなか晴れ間が続きませんでしたが、九時半から三十分ほどの晴れ間のうちに稚児行列が山門から本堂までの間で行われました。短い距離でしたが、親御さんからは少しでも外を歩けてよかった、との声が聞かれました。

それからは雨が続きましたが、悪天候にも関わらずたくさんの方が大根煮に並ばれ、三十分ほどですべてなくなりました。今年は夏の暑さのせいか大根の本数も少なかったのですが、大根自体の大きさも小さく、例年の半分ほどの量しかできなかったのが残念でした。

御遠忌に向けてキャラクターを作られたということで、「鸞恩くん」と「蓮ちゃん」が来ていました。はじめはびっくりしましたが、稚児さんや参拝の方と一緒に写真に撮られたりしているのを見ると、こういうことも大事かなと思いました。

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要に向けて 高田教区での様々な取り組み紹介

いよいよ来年三月より、真宗本廟（本山・東本願寺）で宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要が厳修される。当、高田教区でも各組の団参や「高田教区の日」（四月十五日）での記念講演等準備が着々と進んでいる。

そんな中、御遠忌に向けてすでに開催、実施、製作された三つのプロジェクトについて、担当者にその思いを寄せていただいた。

御遠忌 High School サミット

High Schoolサミット

池の平会場チーフ補佐
第一組西性寺　**田中　竜雄**

今夏、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌青少年交流事業として、「つながりあういのちの発見」をテーマに「High Schoolサミット」が、池の平青少幼年センターにおいて八月二日から七日まで五泊六日の日程で開催されました。

このサミットは、池の平会場のほか、瀬戸内海犬島会場（岡山市犬島）、秋田白神会場（秋田県山本郡八峰町）の全国三会場で行われ、十五歳から十九歳までの青少年が各会場につどい、自然学習をしました。

池の平会場には、北海道より二名、福岡県より二名、島根県より二名の計六名の参加者がつどい、教区内スタッフや本山スタッフ、地元の皆様のご協力も得ながらの開催となりました。居多ヶ浜や五智・光源寺などの聖人御旧跡巡り、妙高・南地獄谷へのトレッキング、野尻湖と犀川でのカヌー、野菜の収穫、養蜂体験、座談会など様々な企画が実施されました。インターネットや携帯電話を使う日常の便利な生活を離れ、寝食を共にし、語り合い、参加者からもスタッフからも、人や自然との「つながり」を感じることができたとの言葉が聞かれました。

そして来年四月三十日から五月一日まで、東本願寺において全国三会場の参加者が集まり「真宗本廟のつどい」が開催されます。今回の自然学習体験中に感じたことや、日常生活に戻った後に改めて気付いたことなどが語り合われます。

養蜂体験

子ども報恩講

子ども報恩講サポートスタッフ
第七組法泉寺　**虎石　薫**

高田教区青少年連絡協議会主催の「子ども報恩講」が、十月十日に高田別院で、十一月三日に新井別院で開催されました。

㈳大谷保育協会高田支部加盟園からご協力いただき、園児が描いた絵画で各別院を彩りました。両日とも、子どもたちとご家族を併せた約三十人の方々とお勤めをし、来年迎える宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要で「子ども御遠忌」を勤める「鸞恩くん」と「蓮ちゃん」も参加してく

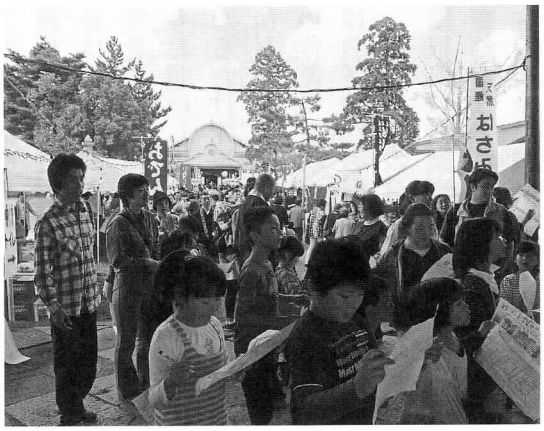
紙しばい

ださいました。

高田別院では山門の宝探しとして、お宝に見立てた扉の彫刻や柱の模様、石畳の割れ目の在処を探し出し、どこにあるか確かめました。通り過ぎてしまうことの多い山門での光景に、参詣された方も思わず足を止めて見回しておられました。

新井別院の稚児庭儀では、子どもたちが着慣れない衣裳をつけて、山門から本堂まで参道を行進。体に馴染まない衣裳の煩わしさに親子共々苦笑いしつつも、雨天の合間の晴れがましい情景となりました。

紙芝居「しんらんさまとやまぶしべんねん」を見聞きしている子どもたちの表情を思い出してみると、その眼差しから、大人である自分の姿勢を問われているような気がしてきます。子どもたちを見守っているつもりでいて、自分の佇まいを子どもたちにしっかりと見つめられているのではないかと。どういう態度が正解であるというのではなく、日常で凝り固まった感覚に揺さぶりをかける機会を持つことが必要なのだと感じます。


子ども報恩講「境内宝物さがし」風景

私の場合は「子ども報恩講」にその機会をいただきました。子どもの眼差しを感じながら、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要に臨んでいけたらと思っています。

尾神嶽殉難ジオラマ製作（ジオラマ班）

御遠忌讃仰委員会ジオラマ班班員
第十二組福正寺　**矢嶋　一樹**

私が所属している第十二組は、旧吉川町全域と旧柿崎町の下黒川、黒川、黒岩地区から構成されている。その吉川から柿崎へ、幕末の戦火で焼失した本山・東本願寺再建の用材を乗せた橇（そり）が移動していた一八八二（明治十六）年三月十二日、尾神嶽の通称岳（だけ）で、献木ごと雪崩に巻き込まれた事件が世に言われる「尾神嶽殉難」であり、命を落とした二十七名の追弔の為、そして後世にこの事跡を語り継ぐため、建立されたのが「報尽以期碑」である。

一時期は地元民からも忘れられ、参拝する人もなく藪の中で眠っていたこの碑は、近年ではようやく整備が進み、教区内はもとより近県からも参拝者が絶えない旧跡になっている。しかしながら、二十七名もの尊い命が奪われながらも、あきらめることなく本山まで欅の大木を納めたお同行の気持ちまできちんと伝えられているのかは、地元に生活する者として、いささか心もとなかったのは正直なところである。

現在製作中のジオラマ

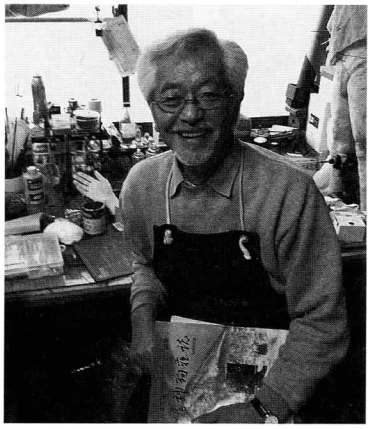
そんな折り、教区駐在教導の藤原氏より、来年に迫った宗祖七百五十回御遠忌法要時の教区展示の核になる何かがないだろうか尋ねられ、「是非とも、尾神嶽殉難のジオラマ（風景模型）を作りましょうよ！」と後先も考えず提案した。実際の所、そんな案は到底教区会では認めてもらえないだろう……と高を括っていたのだが、藤原駐在の熱意と、杉本教務所長のご理解により、あっという間に形になって、ゴーサインが出てしまった。

自分で作るスキルは全くといって無いので、前々からもしこのような機会があれば……と密かに目星を付けていたある人物にそれとなく話をすると、ことのほか好感触で、

・日数はかかる
・手間はかかる
・ギャラは悪い

の三重苦とは言わないまでも、ほとんどメリットのない作業の総指揮を引き受けてくれることになった。

その人物とは、私の二十年来の


製作総指揮の大橋氏

知人で直江津の安江でデザイン工房を主宰する、大橋広史氏（第五組覺真寺門徒）である。仲町のジャズバーのマスターでもある大橋氏は記憶にも新しい、昨年直江津屋台会館で行われていた「越後上越　天地人博」で、春日山城の精巧なジオラマを手がけた方であり、総監督としてはうってつけの人物だった。

大橋氏は、

「集めた資料を読んでみただけでは、どうしてもイメージがわかず、何度も現場に足を運んでみて、何とかここまでこぎ着けました。最初は監修だけすれば……とも思っていましたが、やはり作り出すと気合いが入ってしまってねぇ。ほとんど作ってしまいました（笑）。これからはジオラマ班の皆さんの手元に戻して、最後の根気の要る作業（人形作り）をやってもらいます。

ある意味正念場かも知れませんね。地味な作業だからこそ大事に丁寧に作って、このようなことが百二十七年前に実際あったということを視覚で後世に伝えるいい展示にしたいです。もちろん、これで終わりではなく、最後まで関わらせていただきますよ。」と、語ってくれた。

§　§　§　§

現在大橋氏の工房で大まかな所は完成したジオラマは、十二月中旬からは別院会館に移され細かな仕上げの作業にはいり、三月十日京都に搬入され、期間中展示されます。

これからは、約七十二分の一スケールの人形を作りジオラマの上に配置する作業になり、手不足のジオラマ班員ではとてもこなしきれる仕事量とは到底思えません。どうかこの拙文をご覧の諸氏のお力添えを是非ともお願いします。大橋氏によれば、なるたけ簡単で見栄えのいい人形の作り方をを検討中とのことで、難しい作業にはならないはずです。詳細は教区駐在教導・藤原まで。

なお、このジオラマは阿弥陀堂素屋根内の一階、向かって右側に展示されることが決定しました。是非とも御遠忌期間中に本山に足を運びご覧下さい。明治期の先達たちが、命をかけて山から運び出し、巨大な堂宇を建立した事の意味を今一度考えるきっかけとなれば幸いです。

§　§　§　§

以上、この夏から秋にかけて、高田教区内で行われた、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要に向けて、高田教区内で開催、実施、製作された、なかなかその中身を知り難いものを三つ取り上げてみた。

アプローチは違えども、今回の御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」にそって企画、立案、実施されたものであり、誰のものでもない自分の御遠忌をお勤めする一助になればと思う。

雅遊会メンバー募集のお知らせ

私ども、「雅遊会」は雅楽を演奏することを目的に集まった同好会です。活動を始めてから二十年ほどになり、おかげさまで高田別院並びに、新井、三条、国府（本願寺派）各別院の報恩講あるいは、寺院の落慶、御遠忌そして婚礼等の法要にお招きに預かるようになりました。

この度『響流』誌面をお借りして新規メンバーの募集をいたします。

募集楽器は、

・鳳笙（ほうしょう）
・龍笛（りゅうてき）
・篳篥（ひちりき）

の三管です。

経験は問いません。もちろん初心者大歓迎で、楽器もお貸しいたします。

練習は基本毎週月曜日、午後七時から九時半頃まで直江津の林正寺（住吉町）で行っています。

今年の練習は終わりましたが、来年一月十八日から初心者コースの練習が始まります。

一回目は特別に公開練習会といたしまして、高田別院会館和室で午後二時より行いますので、どうぞお気軽にお越しください。

ご連絡は、高田別院・藤原（〇二五-五二三-二四六五）までお願いします。以降も随時公開練習は行う予定ですので、お問い合わせください。

私たちも最初は全く音が出せませんでした。粘り強く練習すれば、必ず演奏できますので、何かビビッと来た方の連絡をお待ちしています。

聞思学場 ―研修生意見発表―

聞思学場と私の歩み

第一組光徳寺 水嶋 聡

『教行信証』行巻に

また云わく、それ速やかに生死を離れんと欲わば、二種の勝法の中に、しばらく聖道門を閣きて、選びて浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲わば、正雑二行の中に、しばらくもろもろの雑行を抛ちて、選びて正行に帰すべし。正行を修せんと欲わば、正助二業の中に、なお助業を傍にして、選びて正定を専らすべし。正定の業とは、すなわちこれ仏の名を称するなり。称名は必ず生まるることを得、仏の本願に依るがゆえに、と。

（『真宗聖典』一八九頁）

法然上人の『選択本願念仏集』三選の文が引文されます。聞思学場の講義の中で「三選の文のような選びをしていますか。みなさんは浄土門を選んでいますか。正定を選んでいますか。正行を選んでいますか。」と問われたことがありました。私はそのような選びを考えたこともありませんでした。それ以上に「速やかに生死を離れんと欲わば」とさえ起こってこないことを知らされました。なぜ生死を離れんと欲わばという思いが起こってこないのだろうか。

『恵信尼消息』には親鸞聖人が比叡山を下りられるときの様子を

ただ、後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死出ずべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候いしをうけ給わりさだめて候いしかば

（『真宗聖典』六一六頁）

と記され、法然上人からお聞きしていたことが、生死出ずべき道であったことだとうかがわれます。

以前ある先生から「親鸞聖人は比叡山を落第したのです」とお聞きしたことがあります。親鸞聖人は比叡山という聖道門では、生死出ずべき道を見出すことが出来ない落第生であったということです。

このことは、親鸞聖人にとって三選の文「しばらく聖道門を閣きて、選びて浄土門に入れ」ということにつながるように思います。ただ、「聖道門を閣きて」とありますが、親鸞聖人は閣くしかなかったご自身に出遇われたのだと思います。自らの力では生死出ずべき道を見出せ得なかった落第生としての身に直面したのだと思います。

講義の中で井上円先生から「信心とは身を知ることです。この身をどういう風に知るかです。そして、身を知ることを通して阿弥陀仏を知るのです」とお聞きしました。親鸞聖人が聖道門を閣くしかなかった落第生としての自身を知られた。そこに三選の文があらわす信心があるように思います。

「それ速やかに生死を離れんと欲わば」ということも、身を知ることと同時に起こってくるのではないかと思うのです。自らが考えられる生死を離れる手段を全て失った時、もう自分に間に合うものが無くなった時、初めて生死を離れんと欲うのだと思うのです。私が生死を離れんと思えないのは、自らの力で生死の問題が何とかなるということが前提にあるからだということです。言い換えるならば聖道門が開かれているかのよう思っている心根があるからこそ、生死を離れんと欲うということが起きてこないのだと思います。

三選の文は、この道綽禅師の聖道・浄土の選択から善導大師の選択を通し、親鸞聖人が法然上人より頂いた信心の道程であるように思います。

『正信念仏偈』源空章でも

速やかに寂静無為の楽に入ることは、必ず信心をもって能入とす、といえり。

（『真宗聖典』二〇七頁）

とあらわされておられます。

聞思学場では『正信念仏偈』を井上円先生、金子正美先生、鎮西良昭先生より教えていただいています。改めて教えていただきますと、親鸞聖人の出遭われた世界の一端に触れているようにも感じます。それはまた親鸞聖人とは違う私の姿をも明らかにします。そして、何故だろうかと問いに生まれ変わります。そのような問いは、講義の中での様々な言葉と結びつきながら変化していきます。聞思学場はそのような私の歩みの場です。

参加者のひろば

青少年キャンプ

青少年キャンプを終えて

第四組正行寺　**芳野　良英**

今年の八月十八日～二十日、第四・八組企画のもと「光ヶ原高原キャンプ場」にて、第二十七回高田教区青少年キャンプを行わせて頂きました。

私自身、若輩ながらも「スタッフ長」という大任に就かせてもらいました。

テーマは「自然の宝庫・ブナ林トレッキングときらめく星空」。

参加者は、子ども二十八名、大杉の里九名、スタッフ約五十名と多くの方々と共に二泊三日を過ごしました。

一日目の夜は「星空観察」。講師は清里の「星のふる里館」の早川さんをお呼びして行いましたが、あいにく雲が多く星空を一望出来ませんでした。しかし時折、顔をのぞかせた月を、館長さんが持参して下さった望遠鏡でのぞき、「月のクレーター」を自身の眼で観た子ども・スタッフ達の歓喜の声がとても印象に残っております。

信越トレイルを歩く

二日目には信州と越後の間である峠の街道「信越トレイル」を共に歩きました。約七キロの道のりで短い距離と思いがちですが、実際に歩いてみると過酷な道のりでした。しかし、皆と共に歩いたおかげか、また子ども達の明るい声のおかげか、その過酷な道のりが楽しく歩けたと思います。実は私自身は当日膝を痛めていて、トレッキングどころではなかったのですが、スタッフ長を名乗らせていただいた使命感で歩く事が出来たのかもしれません。

夜には恒例のキャンプファイヤーを行いました。各班の出し物（スタンツ）を考える時間が少なく反省する所ですが、各班のスタッフの良き配慮で濃い内容のスタンツを観させて頂きました。

この三日間、スタッフ長として過ごしましたが、経験不足もよい所でした。でも周りのスタッフ方々の御意見・御指摘が良い刺激になり、子ども達の明るく純粋な笑顔が励みとなって共に明るく楽しく過ごせた事に感謝しております。

伝道研修会

浄土について

第六組善念寺　**滋野　憲史**

「浄土真宗と言いながら、浄土がはっきりしない。日常生活では話題にすらのぼらない。」との問題提起を受け、講義が始まった今回の伝道研修会。

正直、伝研では、講義中や座談において中々聞けないことも、寝食を共にすることで聞こえてくる。そのことが私における一番の魅力です。

問題提起にもありました様に、浄土ということが日常会話で語られない今日にも関わらず、入浴や食事、懇談の中で飛び交い、耳が養われるような思いです。

「浄土が功徳そのものであり、ハタラキ・作用である。」と何度となく聞いてきた耳ではありますが、自分の言葉にする事によって吟味されてゆく感もあります。

知識は知識でしかありませんが、寝食を共にすることで、互いに刺激し合う伝研の場こそが、実は穢土を穢土だと知らせ、聖道の在り方を生き方としている私だと知らせる作用を保っている様に感じています。

日常生活と私を問い直す場、それが私にとって浄土であり伝研なのです。

登高座作法講習会

登高座作法講習会を受講して

第一組徳正寺 繁原 如子

【宗祖御遠忌を迎えるにあたり、経導師及び式導師として必要な読法とその他の作法を習得し、その許可を受けることを目的とする】

右記の事を目的として、九月六日より十日迄、登高座作法講習会が実施され、受講した。国元で式嘆徳文を自坊以外で拝読する許可を受けた訳である。昨年《自坊に限る》の許可を受けてはいたものの、許状に書かれていた《ただし読法作法は伝授師について指授を受けること》の部分をようやく受けた事になる。

講習内容は、初日に読法、その後は作法が主となった。古来より相伝されてきた導師の作法は、正直なところ難しいものであり、講習を受けた今となってもすっかり体得したとは言い難い。伝授師の先生は「繰返し繰返し身に付くまで習礼を重ねてください。」と仰った。

実際の場で、私自身が登高座をする事は無いであろう。しかし「知らない・やらない・関係ない」としてしまうのではなく、正しい作法を知って儀式の場に身を置く事は、重要な事なのではないだろうか。威儀を正す、良い機会を戴いた事である。

教学研修会

和讃に遇う

第一組正覺寺 井伊 光訓

ちょうど十年ほど前のことです。なんとなく参加した三木先生の教学研修「讃阿弥陀佛和讃」の講義でした。お講会や法事の時の法話のネタさがしにと、かるい気持ちで参加した研修会でした。

和讃は親鸞聖人の感動のお言葉であることぐらいしかわかっていない私にとってこの研修会は大きな驚きでした。

和語讃嘆、わかりやすい言葉で仏徳を讃嘆する「和解讃嘆」だけでなく、聖人の和讃には本願を念じ本願に出合った感動。仏徳にてらされた感動の讃嘆です。

この事を教えていただいた時、何か背筋がゾクゾクするのを感じてしまいました。

弥陀成仏のこのかたは
いまに十劫をへたまえり
法身の光輪きわもなく
世の盲冥をてらすなり

この広い世界のいきとしいきるものをすべて救うと誓われた仏。

愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑している私。

仏の光に気付かない私、仏の声を聞かない私。「帰命せよ」といつも見守っていてくださる。

ありがたいことです。 合掌

解放推進委員会 公開学習会

「解放推進委員会」公開学習会

第十一組福樂寺 井上 博

十月二十一日、解放運動推進本部委員、山口小夜子氏を講師に、前年度に引き続き「大谷派における差別事象」をメインテーマに表記学習会が開催された。

今年度は「近代大谷派における女性の位置と役割」と題し、明治・大正・昭和における、当派の女性に対する差別に焦点を当てていただいた。

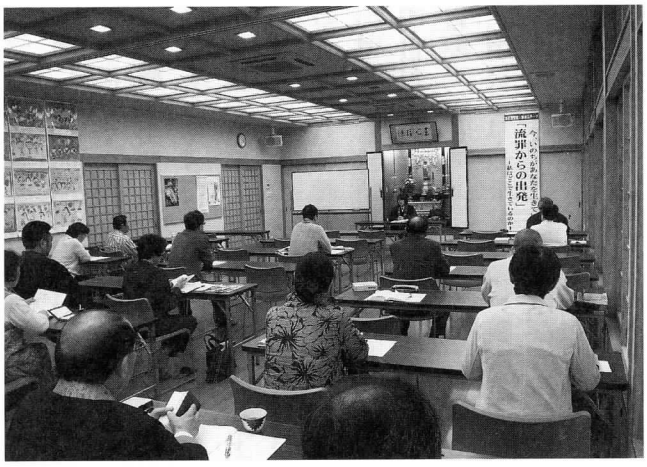
二千五百年前の「五障三従」の教えそのままに、近代におけるまで女性は差別され続けてきた。そして、宗派における女性の位置は「女性(坊守)は『内助者』として位置付けられ、教団の構成員からは性差により排除される一方、『真俗二諦』の教えの『俗諦』の担い手としての女性像を期待されてきた。」(資料より抜粋)とされる。

「得度」も一九四二(昭和十七)年、敗戦間近になって寺院護持のために許可され、住職への道は、わずか十四年前のことである。

前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え、連続無窮にして、願わくば休止せざらしめんと欲す。

(『真宗聖典』四〇一頁)

と最初に押えられていたことを教訓としたい。



宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌
第十三組お持ち受け同朋の集い

第十三組松橋寺坊守　**平野　教子**

九月十六日、近田昭夫先生（東京教区顕真寺住職）に御参加いただき、法要を榮恩寺の本堂にて、組内住職の出仕により、同朋唱和勤行集の日中勤行が堂内に響き渡る、すばらしい仏事に感銘致しました。

その後、午後三時から、近田先生のおはなしを希望館にて聴聞致しました。

親鸞聖人の御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」に、相応しい内容のテーマで「自分でなければやれない仕事」でした。

年を取って、身体が動かなくても、生きている事が、誰かの役に立っている、生きている事が、迷惑という事はけっしてないんだと、自分で引け目を感じないで、人生の仕上げをしていけるような生き方の「問いかけ」でした。私は今回お待ち受けに参加出来たこの時、このいのちに、つくづく有難いと感じました。「いのち」は自分の物と思っておりましたが、「誰かに」「何かに」確かに支えられて、この私がいた事を考えさせられました。来年、東本願寺にて「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌」が行われます。そこに我が身を置き、参拝出来る事を楽しみに、今待っている自分がここにいます。　合掌

センター活動報告

第三回センタートレッキングに参加して

第十一組教願寺門徒　**松苗　正人**

九月二十七日午後、池の平青少幼年センターに集合して二泊三日になるトレッキングが始まりました。夕食後、明日の行動食としておにぎりをみんなで握り、私を含め初参加者もいるメンバーのチーム意識を高めました。

翌日は朝五時起床でした。屋根をたたく雨の音にちらりと不安がよぎりましたが小雨になったこともあり車三台に分乗し出発。志賀高原高層湿原トレイルのスタート地点、硯川温泉も小雨でしたが装備を整え元気に歩き始めました。

途中雨がやむこともあったのですが、志賀山への急登路にかかる頃には雨脚が強まり登山道は川のように雨が流れてました。二千メートルを超える志賀山は雲の中でも高山の雰囲気を味わうことができました。裏志賀山を経由し四十八池まで急坂を注意しながら慎重に下り、ここでセンターで用意していただいた熱々のキノコ汁を心ゆくまで味わいました。

（感謝、感謝）

更に小一時間木道をたどり下山後、硯川温泉で白濁した硫黄の湯を楽しみ、横手山頂にあるヒュッテまで移動しました。雨は止んだものの雲の中で速い速度で下からガスが吹き上がってきます。ここでは素晴しい星空と流れ星の鑑賞が予定されていたのですが、お預けになってしまい、明日の晴天を期待してゆっくりと就寝。

翌日は早朝までの厚い雲が急速に晴れ上がり、遮るもののない三百六十度の景色を楽しみながら帰途につきました。予定通りの時間に全員二十一名が無事センターへ帰ることができ、心地よい疲労感とともにトレッキングを終了しました。

参加された方々、計画し準備を整えていただいたスタッフの方々にお礼を申し上げます。

横手山頂ヒュッテ前にて

つらつらと……

一つの出遇い

第十二組正立寺　真嶋　哲雄

平成二十一年十月で住職五十年となり、戦中戦後、京都での学生生活、学徒勤労動員、応召、復学、極度の食糧難からの栄養失調、十年余の闘病生活と、三十才まで生きられないだろうといわれていた身が、四年前からは酸素吸引しながらも八十六才を生かされている無量なご縁に、自ら頭の下がる日々である。

生涯出遇うものはみな、聞法の縁ならぬものはなく、教典、善知識、詩人、歌手、マスメディア、日常の出来事、自然現象等から、こころ動かされたものを拾い続け、味わい直す事も長寿の一助となっている。

住職の一生は、多くの人々と聞法の座を共有することが多く、誰よりも住職が聞法者であらねばならない。お聖教に聞き、語る時、住職自身の感動が第一であるにしても、なかなか、人に伝えることは難しい。そんな折、大変助けとなるものが先にのべた善知識等の言行である。多くご縁をいただいた中から一つの出遇いの法縁をのべてみたい。

一九六九年十二月、Kさん宅で母親の一周忌、読経後十分位の「念仏について」の感話の助けに「み仏のみ名を称えるわが声はわが声ながら尊とかりけり」（甲斐和里子）の半紙書きを二～三回皆さんにも声を出して味わっていただき、阿弥陀様が、おぞましい生き方をし、傷つけ合って生きていることにも気づけずにいる私達に、何とかして、真実世界に耳目を向けかえて欲しいと、やむにやまれぬ願いを、南無阿弥陀仏という名号（なのり）として呼び続けて下さっている。

案じられている身に気づき仏の呼びかけに応答、呼応させていただく声が念仏の響きであるという様な話をすると、初めて富山から来たという故人の娘婿（五十代）さんが、手帳にうつし取られた。今までお寺で話を聞くことがなかったとのこと、私の友人の寺を紹介すると早速、寺の行事に参加される様になり、手紙のやり取りから、法味いよいよ深めた念仏者となっていかれ、私が大変刺激をうけた方として、今はもうお浄土へお還りになるも、いつまでも忘れ得ない出遇いの一つである。

聞法者として教化者意識をつつしみ、法味の感動を分かち合い、交わし合う中に仏の方から自らはたらきかけて下さること、いや仏のはたらきがこの様な縁をもたらして下さることを深く教えていただいた、仏事の法縁の一コマである。

「アイ♥LIVE♪ 9条！」開催

「真宗大谷派・不戦決議が広がる会」代表　金子　光洋

十月二十日に「真宗大谷派・不戦決議が広がる会」の立ち上げ会として、近藤龍麿さんと天白真央さんを招き、高田別院本堂で「アイライブ九条」のライブを開催した。

前半は近藤さんと天白さんのコミカルな語りが曲間にあり、会場は和やかな雰囲気に包まれた。アメージンググレースの演奏と共に「不戦決議」の朗読があり、後半は非戦・平和の曲へと移っていく。前半と打って変わり、近藤さんの語りは緊迫感があり聴衆は静かに曲に耳を傾ける様子だった。

選曲は両氏のオリジナルソングや非戦・平和を内容としたもの。中でも「戦争を知らない子どもたち'83」は日中戦争の内容が歌われ、その中の一節に「私たちは被害者の子どもで、加害者の子どもなんだね。私たちも殺されたけど、私たちも殺したのですね」とある。この一節を耳にした時涙がこぼれた。こんな詩があり、それに曲が乗っている。日本人の一方的な敗戦国としての被害者感情を強烈に批判し、戦後生まれの子ども達に対しての歴史教育の問題性も批判している。多くの人に聞いてもらいたい曲の一つになった。

真宗大谷派の宗参両議会で一九九五年に「不戦決議」が出たことを現大谷派寺院に関係するどれくらいの人が知っているのだろうか。昨年のライブの際、「不戦決議は知っていたが、改めて読んでみるとこんなことが書いてあったのか。」という声を多くの人から聞いた。大谷派が戦争協力を行ってきた歴史。それを単に「負の歴史」と扱ってしまえば、過去の批判どころか否定で終わってしまう。戦後を生きるわれらが、その歴史的事実の上に立ち、当時どの様に教えを利用し多くの人を死地へ送ったのか。同時に現在の教団内のわれわれ一人一人の取り組みがそうなっていないのかといえば疑問が残るのではないだろうか。むしろ事実を縁として、そのことを本当に宗祖の教えに聞いていく必要があると思う。『歎異抄』に「さるべき業縁のもよおせばいかなるふるまいもすべし」とある。縁さえ整えば世間の地位や肩書きなど関係なく、誰でも加害者にも被害者にもなる。そういうわれらであることを自覚せしめ、出会うことのなかった両者が痛みを感じ本当に出会っていけという呼びかけが「不戦決議」から届くのではないか。

愚僧のつぶやき

〈お内仏の荘厳編 ④〉

今回から仏前荘厳の基本であります三具足を見てゆこうと思います。まず初めに鶴亀の燭台ですが、その起源は中国といわれ、日本では室町時代には使用され、本願寺でも蓮如上人の頃に取り入れたといわれています。ただ、この鶴亀は初めから仏具として用いられていた訳ではなく、もとは床の間の祝言荘りとして珍重されていた様です。鶴は千年、亀は万年といわれるように長寿の王として尊ばれ、鶴亀は現在でも縁起物として祝いの時には欠かせないものとなっています。

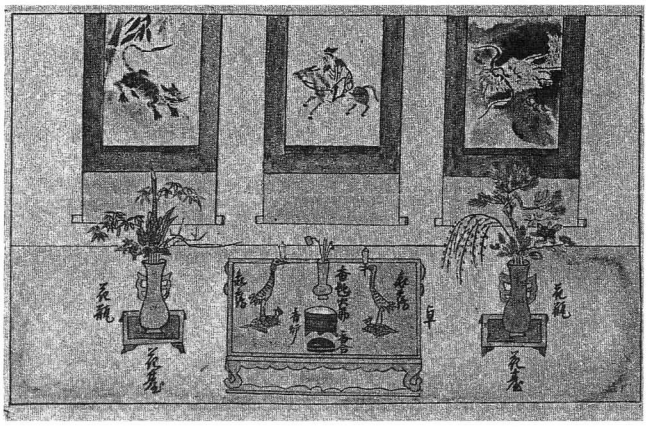
しかし、真宗の教義からいえば、「人生は長さではない、深さである」と言われ、長寿を願う事は親鸞様のお心に添わない訳です。だから、そんな鶴亀は今すぐおろせという激しい声もあった様です。その鶴亀が五百年たった今でも浄土の荘厳として残っているのは、信心の眼をもつ方々がいて下さったからなんです。鶴亀の足の長さの違いから「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず」というお心を頂き、長寿の王たる鶴亀の姿に、時を越えて私の所にまで来て下さった無量寿なる仏様よと手を合わせてこられた事であります。

ただ先日、「どうして亀さんの上に鶴さん乗ってるの、亀さんかわいそうだ」と子供に言われ、ドキッとしました。鶴亀の形の由来には諸説あり、その一つには、お釈迦様にお灯明を捧げたいと思い大海原を渡ってきた鶴が、途中で力尽きて飛べなくなってしまったと。ちょうどそこにお釈迦様にお灯明を捧げたいと願っていた亀がおり、鶴に自分の背に乗ることを勧めて、一緒に一つのお灯明をお釈迦様に捧げたといった話があるんです。ただここで大事なことは、長寿の王である鶴亀が仏教に帰依しているという事です。このことは、たとえどんなに長生きしてもそれだけでは、幸せにはなれないんだという事を物語っている訳です。

尚、鶴亀が本当に長寿の王なのかを確かめる為に近畿一円の動物園に電話して尋ねた所、昭和以降の動物園の記録では、ヨーロッパに百五十七歳の亀が、アメリカに六十歳の鶴がいたと。それに次ぐのは、六十歳の鯨と五十歳の象だが、鯨の生態が分かったのは近年なので、鶴亀が長寿の王と呼ばれてきた事は妥当という話でした。

荘厳とは、時代や地域に大きく影響されるので、大谷派の燭台も一つ違っていれば鯨の上に象が乗ったものとなっていたかもしれませんね。

（ペンネーム　維摩教信）

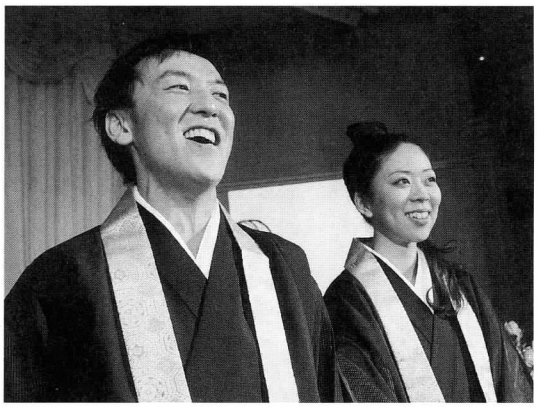


床飾図（『小笠原書』より）

おめでとうございます

第四組　宗専寺様　本堂落慶

第六組　長圓寺様　本堂落慶



第五組　林覺寺様　婚儀

第六組　常榮寺様　婚儀

完納御礼

二〇一〇年度宗派経常費（相続講金・同朋会員志）を御進納いただき誠にありがとうございます。

ここに、早期完納いただきました御寺院名を御披露し、御礼にかえさせていただきます。

第1組
大雲寺　長願寺　光徳寺　本立寺
寶光寺　清雲寺　圓照寺　常誓寺
西性寺　德正寺　正覺寺　光照寺
勝蓮寺　廣傳寺　西光寺　專德寺

第2組
善正寺　法圓寺　東浄法寺　唯心寺
西福寺　興順寺　大蓮寺　常圓寺
陽嚴寺　萬德寺　教念寺　明通寺
通託寺

第3祖
西性寺　正願寺　明福寺　大泉寺
光榮寺　安專寺　本廣寺　應滿寺
正光寺　淨福寺

第4組
宗專寺　皆順寺

第5組
流泉寺　光源寺　林正寺　善正寺
覚法寺　信光寺　忍西寺　寶善寺
蓮光寺　智願寺

第6組
照行寺（春日山）　勝念寺　福成寺　敬覺寺
等正寺　淨光寺　教專寺　金光寺
照行寺（東本町）　明法寺　善念寺　雲妙寺
安養寺　玉梅寺　照蓮寺　蓮受寺
養福寺　西安寺　淨蓮寺　明善寺
常榮寺　樹德寺　了源寺　長樂寺
真宗寺　法林寺　淨國寺　長命寺
最尊寺　淨照寺　林西寺　長德寺
光運寺　本覺寺　得願寺　願重寺
光照寺　唯願寺　善福寺　佛現寺
願清寺　佛性寺

第7組
皆遵寺　入善寺　極生寺　正教寺
願樂寺　照光寺　聞稱寺（新井）　良明寺
康源寺　道因寺　願生寺　誓願寺
善性寺　慶樂寺　宗顯寺　性顯寺
專了寺　圓常寺　西谷寺　靈山寺
福藏寺　願勝寺　敬覺寺　圓了寺
唯念寺　正行寺　長德寺　明道寺
勝福寺　得法寺　光源寺　廣建寺
明樂寺　覺願寺　慈雲寺　聞稱寺（妙高）
淨嚴寺　正善寺　圓光寺（坂倉）　西蓮寺（妙高）
淨善寺（開川）　福因寺　西蓮寺　教蓮寺
正念寺　法泉寺　本龍寺　勝樂寺
妙土寺

第8組
泉光寺　長念寺　正福寺　養林寺
本覺寺　等覺寺　覺善寺　入光寺
覺願寺　延壽寺　阿彌陀寺　稱名寺
善巧寺　大嚴寺　淨音寺　蓮休寺
西方寺　願立寺　淨琳寺　臨行寺

西養寺　向源寺　明善寺　慈圓寺
第11組
照圓寺　鞍馬寺　敬覺寺　本教寺
高德寺　妙玄寺　教願寺　稱專寺
能念寺　光圓寺　一念寺　福樂寺
輪鳳寺　高源寺　了慧寺　照源寺
京德寺
第12組
善立寺　德藏寺　養善寺　明善寺
福正寺　正立寺　延慶寺　横超寺
西願寺
第13組
本敬寺　龍覺寺（荒浜）　信光寺　淨泉寺
願專寺　最尊寺　淨嚴寺　明通寺
松橋寺　德專寺　雙善寺　光德寺
養性寺　照專寺　西念寺　正法寺
養法寺　惠光寺　善照寺　正行寺
龍光寺　了僧寺　光遍寺　稱念寺
船入寺

（二〇一〇年七月一日～十月十二日）
以上　二百十七ヵ寺

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌御修復懇志金御依頼額を完納いただき誠にありがとうございました。

ここに、完納いただきました御寺院名を御披露し、御礼にかえさせていただきます。

第1組
清雲寺
第2組
寶善寺　明通寺
第3組
西性寺　正願寺　安專寺　應満寺
第5組
寶善寺
第6組
淨光寺　玉梅寺　照蓮寺　長樂寺
願重寺　佛性寺
第7組
願樂寺　福藏寺　長德寺
第8組
稱名寺　大嚴寺　蓮休寺　明善寺
第11組
照圓寺　教願寺　能念寺
第12組
光圓寺
第13組
願專寺

（二〇一〇年八月一日～二〇一〇年十一月三十日）
以上　二十六ヵ寺

●おくやみ申しあげます

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

第2組　通託寺前坊守　田中　祐子
第6組　淨光寺住職　小山　善住
第6組　淨照寺前住職　二所宮惠照
第7組　淨善寺住職　飯沼　真教
第8組　西養寺前住職　小笠原　隆

●おめでとうございます

◎住職任命
第8組　入光寺　龍池　修
第8組　願立寺　草間　洋文
◎得度式受式
第1組　西光寺　小柳　真紀
第1組　西光寺　小柳　要
第3組　明了寺　杉田　滉
第6組　雲妙寺　岡田　美佐
第6組　雲妙寺　岡田　清哉
第7組　妙行寺　伊藤　貴子
第7組　妙行寺　寺澤　来華
第7組　聞稱寺　水野　麻琴
第13組　龍覺寺（荒浜）　相田　洋
第13組　養法寺　松岡　朋貴

『響流』編集委員会からの依頼原稿、並びに、お寄せいただいた原稿については、漢字の使い方・言いまわし等、できる限り執筆者の表現を尊重して掲載させていただいております。

◆こもれび◆

昨年の冬は予期せぬ大雪となり、大変苦労したことを覚えている。

雪国の冬だから、雪が降るのは当たり前なのだが、雪の大変さをいくらか体験している私は、長期予報が当たっていることを願って、むしろ信じ込んでいたように思う。

そして予想外の積雪、それでも、もうこれで今年は降らないだろうと高をくくっていた矢先に、さらに雪、そしてまた……。

雪国育ちを誇りに思っているはずの私が雪国の冬をあなどり、覚悟しなかったために、雪国の冬に降る雪に翻弄され、大変悩まされた冬となった。

本当の宗教は、「死」を恐れなくなるのではなくて、「死」を受け入れ、覚悟することだと伺ったことがある。「死」を覚悟することで見えてくる生き方があるようだ。

雪国の冬の風物詩である雪さえ覚悟できずに翻弄されている私は、「死」を見て見ぬふりをして覚悟などできずに翻弄された生き方をしているのかもしれない。

今年は冬囲いもしっかりとやっています。

（淀野）